



2023 年

1 月 第 3・4・5 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 1 月 1 5 日 : ヨハネ福音書 1 : 3 5 - 4 2 .

『 見よ、神の小羊 』

・ 1 月 2 2 日 : ヨハネ福音書 2 : 1 - 1 1 .

『 水から葡萄酒 』

・ 1 月 2 9 日 : ヨハネ福音書 3 : 1 - 1 0 .

『 真理の保留 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

見よ、神の小羊と叫んだのは、神でも小羊でもない洗礼者のヨハネでした。彼はその前日、エルサレムから差し向けられた祭司やレビ人、パリサイ人から身上調査を受けていたのです。「あなたは誰なのか」、「メシアでも、エリヤでも、あの預言者でもないとしたら、なぜここで洗礼を授けているのか」と。彼らが想定している「洗礼者の資格」が、ここに見て取れます。けれどもヨハネは、自分はそのいずれでもないことを明言し、こう答えたのでした。

私は、預言者イザヤが言ったように、「主の道をまっすぐにせよ」と、荒れ野で呼ばれる者の声である。(ヨハネ福音書 1 : 23)

イエスが「言」(ヨハネ福音書 1 : 1 - 5)で、ヨハネは「声」であることが、ここに示されているのです。領主による処刑が迫っている晩年の「声」の前に、「言」がなんとか辿り着く時が来ます。両者が、相まみえるところから宣教の時が開始されます。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」。久しく待ちにし「神の小羊」がとうとうヨハネの前に出現します。待機して待てと、ヨハネを遣わした神が命じられたとおりに、甲斐あって、その目的は達成されます。ヨハネは、「霊が下って、その人の上にとどまるのを見たら」、その人こそ神の子だと教えられていたのでした。

彼の二人の弟子もその教えを享受します。翌日、ヨハネが二人の弟子と共に外に立っていると、神の子イエスがそこを通りかかります。その時ヨハネはすかさず声を上げます、「見よ、神の小羊だ」と。すぐさま彼らはヨハネの許から巣立ってイエスの弟子となりました。

そのうちの一人がアンデレでした。彼こそイエスに従った最初の弟子だったことがわかります。彼はその足で兄を迎えに行きます。そして自分が「メシアと出会った」ことを告げます。告げられたのはヨハネの子シモン、彼はこの直後にイエスからケファ(ギリシャ語ではペトロ)という綽名を付けられ、その後は一貫してそれが呼び名として定着しました。ヨハネ福音書は、漁師の兄弟の二人がガリラヤ湖でイエスと出会う前に、ヨルダン川の岸边ですでに一度、出会っていたことを教えてくれます。

その結婚式の世話役は言いました、「誰でも初めには良い葡萄酒を出し、酔いが回った頃になってから劣ったものを出すものだが、あなたは良い葡萄酒を今までとっておいたのだね」と。そう言われたのは、身に覚えのないこの日の花婿でした。もちろん返答は、「・・・・・・？」。

真相は、この日、葡萄酒の不足に最初に気が付いたのはその場にいたイエスの母マリアで、なぜかこの窮状を息子のイエスに伝えます。おそらく彼の、いつものそっけない返答(「女よ、私とあなたの間に如何なる関係があるのか」)を予測しつつ。さらに宴の給仕の裏方に、手際よく、イエスとの協働を依頼します。仕事の内容は水瓶6本を水で満たし、世話役まで持って行くことでした。1本3～40ℓも入る水瓶でした。この予定外の出来事に、世話役はさぞかし驚いたことでしょう。もちろん中の液体が美味しい葡萄酒であることは直ぐにその香りが教えてくれました。花婿の「身に覚えのない葡萄酒」はこうして婚礼の席で振る舞われます。

主の山に備えがある(創世記22章)ことと、葡萄酒の不足の解消との間にいかなる関係があるのかを、紐解いた人はいませんが、どちらも同じ神によってなされた事です。

さて、人と人が結ばれる結婚という出来事は、神を介してこそ成立するという真実を聖書は教えています。つまり、カナの婚礼は神自らが葡萄酒を振る舞うことによって、参列者に絶大なる祝福を賜っていたことがわかります。この無名の新郎新婦の子孫が、後のキリスト教会の支えとなっていたかどうかは誰も知りません。

世界を滅ぼすことも出来る神とは葡萄酒の不足を補う神でもあります。この神は石をパンに変えることはしません。同様に戦車やミサイルの不足を補うこともしません。流血をもって勝利が得られますようにと、いくら祈っても、その祈りは聞き届けられることはありません。命の造り主の意志に反する祈りは、神ではない人間の祈りとして旧約聖書にはたくさん出てきますが、新約聖書ではイエスによって否定され、ことごとく退けられました。

読者にはくれぐれも、そこから何かを学び取ることが要求されます。もしキリストのアイコンを用いてでも、侵略戦争を美化しようとする者がいるのなら、その者の運命は神に委ねられることになるでしょう。

新共同訳聖書では「議員」、最新の聖書協会共同訳では「指導者」という日本語に訳されている“ἄρχων”という古代ギリシャ語は、本来、第一位（第一人者）」を意味する言葉ですが、他にも主席、有力者、場合によっては有識者という意味にもなります。ニコデモの社会的地位（？）を裏付ける言葉のようです。おそらくは学識経験者でもある彼が、ある夜イエスの許を訪れて、語りかけます。

ラビ（先生）、あなたが神の許から来られた教師であることを、私どもは知っています。神が共におられるのでなければ、あなたがなされたような徴は、誰もなすことができません。

これは前章の23節に記された内容を物語っています。「イエスが過越祭でエルサレムにいた時に、多くの者が彼のなした徴を見て、彼の名を信じた」ことが記されています。

さて、不特定多数の者がそれを「見て彼の名を信じた」のと比べると、ニコデモは信じたのではなく、そこで徴がなされたことを「知っている」ので、その場からイエスを追尾して、事情を聴取するために来たのです。彼は腹をすかして後を追ったものではありません。この、「信じた」とことと「知っている」とことの差異が問題となります。両者の溝は埋まりそうにもありません。

さて、イエスのいるところは常に神の国の中心ですが、目の前のニコデモはその国には入れません。せっかく追いついたニコデモにイエスはそのことを教えます。あなたは知りたいことを知り尽くすことはできず、信じた者だけが、神の国に入れられるのだと。この国の扉は知識の鍵では開かないのだと言わなければならない。

私たちは何の知識もなく親から生まれました。その記憶さえなく、新しくこの世に生まれたのです。神の国の中へと生み出される者も、全くこれと同じであることをイエスは教えます。人間は、神やその国のことを知識として所有することはできないけれども、信じてそこに入ることはできると。「水と霊とによって、新しく生まれなさい」と。ニコデモの社会的地位は、神の国では一切必要のないものだったのです。